

令和5年度事業報告書

(令和5年4月1日から令和6年3月31日まで)

特定非営利活動法人おっちラボ

1 事業年度内の理事会・総会開催概要

①総会

- ・令和5年5月25日
開催場所：三日市ラボおよびオンライン会議システム
出席者数：10名（うち評決委託者5名）／正会員数10名

<報告事項>

- 第10期(令和4年4月～令和5年3月)監査報告
- 第11期(令和5年4月～令和6年3月)事業計画について

<決議事項>

- 第1号議案 第10期事業報告及び決算について
- 第2号議案 代表理事の役員報酬・賞与額について

②理事会

- ・令和5年4月7日（みなし決議）
出席者数：3名

<報告事項>

- 第10期事業報告及び決算見込み

<決議事項>

- 第1号議案 第11期事業計画及び予算案
- 第2号議案 代表理事の役員報酬及び賞与
- 第3号議案 白石理事を代表とする会社との業務委託契約締結
- 第4号議案 第11期定時総会に付議すべき事項

<協議事項>

- おっちラボの中長期の目標について

- ・令和5年11月10日
出席者数：3名

<協議事項>

- 来期事業の設計

2 事業の概要および成果

(1) 課題解決人材育成・確保事業

別紙1「令和5年度課題解決型人材育成・確保事業実施報告書」参照

(2) 森あそび雲南事業

令和4年に制作した「雲南もり旅」のPR動画の英訳版制作

(3) 高校生GISワークショップ

別紙2「事業結果報告書」参照

(4) 地域運営組織2.0

(a) 地域自主組織との連携により、集落単位の里山整備を2エリアで実施

(b) 地域自主組織及び郵便局との連携により、集落営農の広域化を支える仕組みの実証を開始。詳細は別紙3「事例2 郵便局×地域自主組織によるあらたな共助の仕組み」参照

(5) データプラットフォーム事業

令和4年度に構築した超獣害対策アプリ「うんなんケモナビ」を発展させ、民間企業と連携し鳥獣出没のAIカメラによる検知の実証実験を実施。

3 事業の実施に関する事項

①特定非営利活動に係る事業

事業名	実施場所	事業実施の期間 (契約期間)	従事者数	受益対象者数	事業費 (単位：円)	
					経常収益	経常費用 収支合計
課題解決人材育成確保事業	雲南市内	R5. 4. 1～ R6. 3. 31	4名	200名	15,726,000	14,112,167 <u>1,613,833</u>
森あそび雲南	雲南市内	R4. ～R5. 12. 31	1名	10名	48,500	118,305 <u>▲69,805</u>
高校生GISワークショップ	雲南市内	R5. 6～R6. 3. 31	3名	10名	500,000	350,243 <u>149,757</u>
地域運営2.0 (林産業人材配置等)	雲南市内	R5. 7～R6. 3. 31	2名	100名	1,500,000	1,529,380 <u>▲29,380</u>
講師派遣	全国	随時	1	50名	204,630	0 <u>204,630</u>

②その他の事業

	データプラットフォーム事業	研修受入事業	業務代行事業
経常収益	4,289,959	35,000	708,400
経常費用	1,538,538	0	537,453
収支合計	2,751,421	35,000	170,947

※データプラットフォーム事業には、このほか経常外費用として固定資産圧縮損3,094,611が決算書に計上される。

【別紙1】

令和5年度課題解決型人材育成・確保事業
実施報告書

特定非営利活動法人おっちラボ

【目次】

1. 事業のねらい	1
2. 前年度までの主な実績	2
3. 事業実施体制	3
4. 事業実施内容とその成果	3
4.1. スペシャルチャレンジ・ホープ制度における支援	4
4.2. Seed ラボ～起業家・事業家が育ち合うコミュニティづくりの組成及び運営～	7
4.3. Seed ～起業型地域おこし協力隊による生態系強化～	14
4.4. ローカルベンチャー推進協議会の雲南ローカル事務局業務	17
5. 総括～今後への提言～	21

主な事業の成果

プロジェクト名	主な成果
スペシャルチャレンジ・ホープ伴走支援	申請前の事前相談を13名に実施。最終的に4名に申請してもらい、共創会議で審査を行った。 最終的に採択は3名で、地域課題（とくに農業に関するもの）を解決しうる事業拡大及び起業を行った。
Seed ラボ	6ゼミで合計37回の集まり。ユニーク195名の参加者を獲得。 スペチャレ採択者、Seed採択者、Seed応募者なども参加し、チャレンジャーどうしの関係構築、ゼミ間での連携によるプロジェクト創出が起こってきている。
Seed～起業型地域おこし協力隊募集～	3名が応募、うち2名がプラン発表・採択。応募者の現地滞在中に応援者となる地域のキーマンとの接続により、個人の構想を超えたインパクトある計画を提案することができた。
ローカルベンチャー協議会	カンファレンスでの分科会企画の活用等により、里山ツーリズム協議会の設立と関係者の巻き込みが進展した。

1. 事業のねらい

雲南市は、平成 27 年度から平成 36 年度（当時）までの 10 年間のまちづくりの目標と方向性を示す「第 2 次雲南市総合計画」及びこれを基に策定した「まち・ひと・しごと創生雲南市総合戦略」において、若者や地域自主組織等による地域課題解決に向けた取り組みを促進し、多様な人材や団体等が課題解決にチャレンジする総働のまちづくりを推進することとしている。子どもから若者、シニア世代まであらゆる世代を通してチャレンジに優しいまちを目指している。現在では「第 3 次雲南市総合計画」の策定が進められており、そこでも引き続きチャレンジを重要な価値観とすることが検討されている。

雲南市をはじめ多くの地方で、課題解決や仕事の創生等による持続可能な地域づくりの推進や定住対策などの重要性が高まっている。その中でも、20～30 代の若者世代は地方創生の即戦力として活躍が期待されている一方、就学や就職で市外へ流出する割合も高くなっている。若者世代にとって魅力的なまちづくりに取り組み、雲南市で課題解決にチャレンジしたいと思う若者を増やしていくことが重要である。

地域づくりや地域の課題解決を、実践を通して学ぶ幸雲南塾は、県内でも先進的な取り組みとして、2011 年以降多数の卒業生を輩出してきた。平成 23 年度に市が次世代育成事業として始めた『幸雲南塾～地域プロデューサー育成講座～』は、昨年度で 11 期目を迎えたが、同塾が対象としてきた人材層の発掘は今後は地域コミュニティや他のプログラムに委ねられると判断し、今年度は同塾を開講しないこととした。

一方で、上位プログラムとして位置づけた雲南スペシャルチャレンジ制度（ホープ）（以下「スペチャレ・ホープ」）への申請者数は伸び悩んでおり、案件発掘が課題であるところは過年度と同様の状況であった。昨年度試行的に実施したチャレンジコミュニティ創出（起業家・事業家が育ち合うつながり・連携のコーディネート）をプログラム化し、幸雲南塾経験者など雲南の事業家をゼミ長とするラーニングコミュニティ「Seed ラボ」として、多くのチャレンジャーをつなげることを目指すこととした。

また、地域外との連携基盤として、今年度も、ローカルベンチャー協議会の雲南事務局業務を担った。

2. 前年度までの主な実績

平成 25 年に塾の卒業生たちが塾生を相互支援する仲間のネットワーク強化のため立ち上げた任意団体「おっちラボ」は、平成 26 年に NPO 法人化し、同年より幸雲南塾の事務局を担っている。

また平成 30 年度より、事業化を目指す起業家に資金を提供する雲南スペシャルチャレンジ制度（ホープ）（以下「スペチャレ・ホープ」）の申請者および採択者の伴走支援を行っている。

当法人の強みは県外の事業家／起業家人材との接点であるが、その点をより強化していくために平成 29 年よりローカルベンチャー協議会のローカル事務局を担い、全国のベンチャー支援団体や自治体、起業家との情報共有を常に行っている。

平成 23（2011）年度 雲南市が主催する次世代育成事業『幸雲南塾～地域プロデューサー養成講座～』として開講。社会起業や地域貢献を志す若者の企画立案と実践をサポート。第 1 期（13 名卒業）

平成 24（2012）年度 幸雲南塾第 2 期（11 名卒業）

平成 25（2013）年度 幸雲南塾第 3 期（11 名卒業）

	塾の卒業生による任意団体「おっちラボ」設立
平成 26 (2014) 年度	幸雲南塾第 4 期 (25 名卒業)、NPO 法人おっちラボ設立
平成 27 (2015) 年度	幸雲南塾第 5 期 (4 組 6 名卒業)、ラボアカデミー (9 名修了)
平成 28 (2016) 年度	幸雲南塾第 6 期 (3 組 6 名卒業) ラボアカデミー (14 名修了)
平成 29 (2017) 年度	幸雲南塾第 7 期 (11 組 : 4 法人及び 11 名卒業) ローカルベンチャー推進協議会にローカル事務局として参画
平成 30 (2018) 年度	幸雲南塾第 8 期 START (6 組 7 名修了) スペチャレ・ホープ第 1 期 (3 組採択)
平成 31・令和元 (2019) 年度	幸雲南塾第 9 期 (4 組 34 名) スペチャレ・ホープ第 2 期 (4 組採択)
令和 2 (2020) 年度	幸雲南塾第 10 期 (7 組 7 名) スペチャレ・ホープ第 3 期 (2 組採択・7 組育成枠)
令和 3 (2021) 年度	スペチャレ・ホープ第 4 期 (2 組採択) 幸福雲南塾第 11 期 (前期 3 組・後期 8 組)
令和 4 (2022) 年度	スペチャレ・ホープ第 5 期 (3 組採択) Seed (企業型地域おこし協力隊) (2 組採択)

3. 事業実施体制

平成 27 年度より市民への若者のチャレンジに対する理解を促し、それまでの経験で培われた多様なスキルを活かし、活動するコーディネーターを配置した。本年度もこの体制を継続し、ファンドレイジング・マネタイズ・組織基盤構築・組織運営などを手がける人材を誘致し配置することで若者チャレンジを支援する中間支援組織としてのサポート力を強化した。

<コーディネータープロフィール>

小俣健三郎	(配置理由) 1981 年東京都生まれ。平成 27 年 5 月に雲南市へ I ターン。東京で弁護士として働いており、ビジネスモデル立ち上げの際に法務的な支援が可能なこと、NPO や社会起業家との人脈があり (新進気鋭の NPO が多数加盟する新公益連盟の監事を務めた)、都市と雲南のパイプ役を担えること。
石倉達也 (業務委託関係)	(配置理由) 1993 年松江市生まれ。島根県庁を 5 年勤務し、3 年間は公益法人指導監督業務を経験。県庁時代に雲南市吉田宇山地域で草刈り応援隊を地域住民と企画、その他邑南町で CF 等も実施した。令和 3 年より福島県双葉郡大熊町の復興支援の業務に携わるほか、全国地方の伝統芸能等のモノづくり支援に取り組む Local Craft Market 事務局スタッフや、江津市でベンチャー農業に従事するなど、地域づくりに関連する活動実績がある。
佐野慎太郎 (業務委託関係)	(配置理由) 1995 年大阪府生まれ。島根大学卒業後、島根県中小企業家同友会事務局に入局。1 年後に独立し、2021 年に個人事業主 "As it" を開業、2022 年に株式会社ゲテモノを設立。松江でカーシェアリング事業を運営するほか、松江起業エコシステム MIX 運営、宿泊サービスの立ち上げ・新規事業立ち上げ支援にも携わる。

4. 事業実施内容とその成果

令和5年度は、以下の事業を実施した。※各項目について報告書末に参考書類を添付

- 4.1. スペシャルチャレンジ・ホープ伴走支援
- 4.2. Seed ラボ～起業家・事業家が育ち合うコミュニティづくりの組成及び運営～
- 4.3. Seed ～起業型地域おこし協力隊による生態系強化～
- 4.4. ローカルベンチャー協議会と連携した人材誘致・育成
- 4.5. その他

4.1. スペシャルチャレンジ・ホープ制度における支援

① 申請者伴走支援

平成30年度より雲南市が開始した雲南スペシャルチャレンジ（以下スペチャレ）・ホープ事業は、雲南市の課題解決または価値創造に寄与する事業を起こす者を対象に、金融機関の融資や寄付、出資と雲南市からの補助金の同額マッチング（上限200万円）および保証料・利子補給を行うものである。

昨年度同様、おっちラボは事務局を務めるとともに、応募者に対し応募申請前のプロジェクトのブラッシュアップ支援、および採択者に対しアドバイザー等による伴走支援を行った。今年度は、昨年度の反省と共創委員からのご意見を踏まえ、本審査会前に共創委員からのフィードバックをもらうブラッシュアップ会を開催するという改善を行った。（参考資料 [1-1,1-2](#) 参照）

<採択者とプロジェクト内容>

採択者および、構想内容は以下のとおり。

R4年度実績：採択者は3名。いずれも平均12回は壁打ち等の打合せを個別で実施				
	プランの詳細	拠点	ビジネスモデル	面談回数
武田拓也さん 稲わらを餌として畜産農家に販売	対象：市内畜産業者 実施サービス： 農業と畜産業が連携した稲わらの地域内循環	雲南全域	✓ 餌を輸入に頼り、高騰に悩んでいる畜産業者へ稲わらを安価で提供 ✓ 農業連携は結果が出るまでに時間がかかる。	計14回
新屋京子さん まこもを使った出雲産菰座の生産・販売	対象：全国の寺社仏閣関係者・神事関係者 実施サービス： 出雲産菰座の生産・販売	山王寺	✓ 編み手2名育成中のため、生産人員も確保。 ✓ 菰座以外にもまこも製品に需要があることが判明。	計15回
藤原潤さん 雲南コットンの生産・販売事業	対象：国内アパレルメーカー 実施サービス： 雲南産コットンの生産・加工・販売	雲南市大東町	✓ 売上割合は材料販売が52%、商品の直接販売が26% ✓ 計5社の取引先が決定。新製品の開発を行う。	計7回

採択者の今期の到達度は以下のとおり。

「SDGsな稲作農業への取り組み」武田拓也さん

稲わら生成から畜産農家への提供を実現。PDCAを回せた1年に。



想いと課題意識を行動に昇華。
畜産業者と連携し、ビジネスモデルを構築。

餌の不足・高騰が深刻な畜産農家と単価低下が深刻な米農家のニーズを聞き、事業をスタート。地元企業の熟豊ファームと連携し、今年度生成した稲わらロール10個を提供しました。

PDCAを回せたから見えてきた課題

農業は収穫の時期もあり、PDCAを回すのに時間がかかります。今年度は雨が続いたためスケジュールの鈍化、生成量の減少、ぬかるみによる作業効率の低下が大きな課題となりました。その見えてきた課題を来年度に活かします。

来年度以降の展望について

来年度は収穫時期が早い品種の米を作り、降雨量の少ない時期に稲刈りができるようにします。また、コンバインの稲刈り位置を高くする事も品質向上のため大事になることも分かりました。上記の改善を行い、元の事業計画に追いつきます。

2



「出雲国菰座を過疎化の進む地域の生業に」新屋京子さん

クラウドファンディングから見えてきた新たな市場と共感の輪



山王寺の棚田・景観を守るための生業づくり

神奈川から山王寺にターンしてきたから分かる地域の魅力。そんな魅力ある山王寺の棚田を守るために、自生もしているまこもを使った“出雲国産菰座”の生産・販売を開始しました。

クラウドファンディング112%達成

ソーシャルビジネスを応援するfor Good というサービスを使いクラウドファンディングを開始。目標金額の112%を達成し、その他直接寄附も含めると70万を超える額が集まりました。寄附以外にもまこも商品の受注、製作依頼にも繋がっています。

見えてきた新しい市場とまこもの可能性

元々想定していた“出雲国産菰座”以外にも入浴剤等の製作依頼もあり、来年度以降の事業計画は上方修正されました。菰座の編み手育成もしており、山王寺に新しい生業が定着しようとしています。

3



「雲南コットンを全国に広め産地化を図りたい」藤原潤さん



取引先は3社から5社に。世界観に共感する事業者と連携。



雲南コットンを全国に広めたい

「自分らしく気張らずに着られる良い服を作りたい」という想いで雲南市大東町でコットンの生産・販売を行う。生産されたコットンから、アパレルメーカーと連携して女性用のインナーやベビー服等を製造している。

販路拡大・新商品の開発も実現

今年度は材料(糸・生地)としての販売に注力しました。アパレルメーカーを中心に、計5社と取引を実現。新製品の開発も行っており、現在は出雲でオーダーメイドのベビー服を製造している会社と連携し、既存のシャツ生地を使用した商品を開発中。

安定した供給の仕組みも構築中

雲南コットンの産地化を目指して、綿農家の拡大も行っています。綿栽培の契約農家の生産も今年度は計3反と増加しました。今後も地元農家と連携して、生産量を増加させていきます。

4



<その他申請者について>

Misfits Japan 合同会社(代表ソン サンヒョン)の「生マッコリで雲南市を元気に」のプランについて、申請に向けて伴走支援を行っていたが、酒造免許の取得が間に合わず申請辞退となった。来年度のスペシャレ申請に向けて、酒造免許の取得、事業計画の修正を引き続き行う予定。

② 採択者の伴走支援

<採択前・後における支援内容>

採択者には、全員に対して平均 12 回以上、担当者の壁打ち MTG の機会を設けたほか、希望者に対しては島根県よろず支援拠点コーディネーターによる個別面談の機会や、山元氏による事業内容のアドバイスを実施。

採択者	おっちラボの支援内容	採択者の実践
武田氏	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な壁打ちを実施。どんな事業を具体的にやりたいのかの言語化をサポート 事業内容について、具体的にどんな事業展開を目指すのかを絞り込む 	<ul style="list-style-type: none"> 200 万円の融資獲得 稲わらロール 10 個を生産し、畜産業者へ提供
新屋氏	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な壁打ちの実施。事業内容は確定しているため、販路拡大と安定した供給の仕組み作りについて伴走を行う 山元氏にアドバイスをもらいながら事業の経理面についても整理 クラウドファンディング”For Good”での資金調達を実施。For Good 事務局との打ち合わせに同席し、調達方法についても面談の 	<ul style="list-style-type: none"> クラウドファンディング+直接寄附にて計 80 万以上の資金調達 菰座の販売・提供の他に、販路拡大による新商品開発も実施 2 名の編み手を育成中

	実施。	
藤原氏	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な壁打ちの実施。審査会に向けて、検討すべきポイントの洗い出しや、事業の最終ゴールについて検討を行った 山元氏にアドバイスをもらいながら事業の経理面についても整理 	<ul style="list-style-type: none"> 100万円の融資獲得 取引先が3社から5社に増加 綿花の提携農家が1軒増加

<主な成果>

- 本採択の3事業者において新規事業・事業拡大が実現
 - 武田拓也さん：稲わらロールの生産・畜産業者への提供を実現。
 - 新屋京子さん：出雲國産まこもを使った菰座の生産販売を実施。
 - 藤原潤さん：雲南コットンの取引先を5社に。新商品も開発中。
- 上記より、結果的に1社の事業者が事業拡大を達成し、新規起業2名が雲南市に誕生した。

③ スペチャレ・ホープ次年度に向けた案件発掘

近年スペチャレホープの申請者が伸び悩む傾向があることから、その対策として後述のSeedラボからの推薦や紹介を受け、年末ころから面談を開始した。

現在までに、5組と来年度の申請の可能性について協議している。

④ スペチャレ・ホープ次年度の事業説明資料の作成

上記同様、スペチャレホープの伸び悩みに対する対策として、事業説明資料を作成。これを4月以降にこれまでのスペチャレOBOGや雲南市各支援組織に配布し、宣伝の協力の要請を行った。

⑤ 活動報告会の企画運営の補助

以下の概要でスペチャレ活動報告会が開催され、おっちラボはスペチャレ・ホープ部分の運営補助を担った。

と き	令和6年3月24日(日) 9時30分～12時00分
と ころ	雲南市役所
9時30分	開会・あいさつ
9時50分	スペチャレ実践報告(1) ジュニア
11時00分	スペチャレ実践報告(2) ユース
11時15分	スペチャレ実践報告(3) ホープ(起業家3組)
12時00分	閉会・あいさつ

<参考資料>

- 資料 1-1：2023年7月1日ブラッシュアップ会議事録
- 資料 1-2：2023年7月1日ブラッシュアップ会フィードバック資料
- 資料 1-3：山元氏面談事前打合せ資料

4.2. Seed ラボ～起業家・事業家が育ち合うコミュニティづくりの組成及び運営～

(1) Seed ラボの概要および目的

令和 4 年度に、課題解決事業の”種”をもつ起業家らとのプロジェクト会議を多数回実施したが、令和 5 年度は、次年度のスペシャレ・ホープへの流入数をより確実にするため、多くのチャレンジャーが参加できる学びの場として、新規プログラム「Seed ラボ」を始動した。

Seed ラボは、企業、起業家、市民等多様な主体が参画し、立場、役割などの垣根を超え関係性を構築することで、互いに学び合い成長するためのコミュニティ組成を目指した。ただしコミュニティ自体を目的とするのではなく、具体的な地域課題を軸に同分野で実践する仲間を集めてプロジェクト化するなかから相互理解や連携が生まれるという想定のもと、下図にある 6 つのテーマを設定し、それぞれにメンターとなる先輩事業家を「ゼミ長」として配置した。

ターゲットとして、コミュニティを豊かにするために、過去の幸雲南塾等の参加者だけでなく、地域自主組織等の地域密着で活動する団体、都市部等で実践的な知見を有する企業人や起業家等の参画を促すことに留意した。

また、スペシャレ・ホープや Seed との関係において、これまでの個別伴走以上に Seed ラボで形成された「コミュニティが伴走する」というスタイルを目指した。

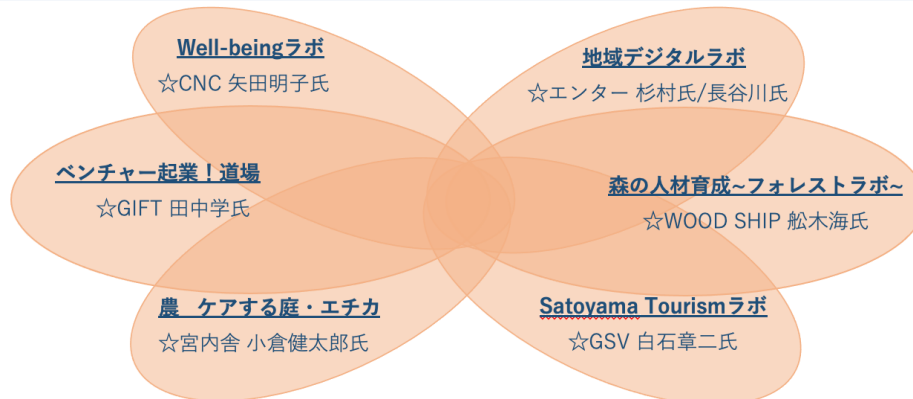
Seed ラボ概要

起業家・事業家が育ち合う土壌としてのラーニングコミュニティ

対象：過去の若者チャレンジプログラム参加者や地域おこし協力隊等を含む、雲南地域の課題解決や活性化を目的としたマイプランをもつ人

目的：先輩起業家等を軸とした学び合いのコミュニティをつくり、相互連携によって地域に変化を生み出していくチャレンジャークラスターを可視化・強化

内容：テーマごとに雲南の先輩起業家等をゼミ長（☆）として配置し、各テーマゼミの企画を担う。講師を招いた勉強会、マイプランへのアドバイス、フィールドワークなどを盛り込む。4月～12月まで各テーマ1回程度開催し、中間的な全体会を1回、最終報告会を1回開催。



(2) テーマ及びゼミ長の選定理由

テーマは、雲南市の共通課題あるいは産業の軸となる資源から選定することとした。またゼミ長は、そのテーマ領域に関して雲南で事業展開をしていること、複数の事業者の連携をファシリテートして相乗効果を高められるようなプロデューサー視点をもつこと、試行錯誤中の起業家に対して豊富な事業経験に基づく助言を与えられること、という観点から選定した。

①Well-being

幸雲南塾においてこれまで多くの医療・福祉に関する取り組みが生まれてきている。その一つであるコミュニティナースの取り組みが地域外から大きな注目を浴びるようになり、それを起点として地域外の起業との協働や地域内連携が進んでいる。この状況に鑑みて、さらに地域内で医療・福祉関係の新しいサービスが生まれる可能性があり、さらに地域住民にとっての Well-being 向上というより広い視点で連携をしていくことが、社会的経済的にインパクトのある産業を生み出しうると考えた。

ゼミ長の矢田明子氏（株式会社 CNC）は、上記コミュニティナースを事業化し、他地域にも広く展開しつつ、地域内外の多数の企業と連携していることから、本ゼミのゼミ長として選定した。

②ケアする庭・エチカ（農と関係人口）

市内に広がる農地は雲南の重要な資源である。木次乳業の有機農法の伝統もあり、雲南には脳ある暮らしを求めて移住する人も後を絶たない。しかし全体としては高齢化と後継者不足により、農の放棄が進んでいる現状であり、持続可能な農のシステムを構築することが急務である。それにもかかわらず幸雲南塾などでは「農」を軸とした事業立ち上げを志すチャレンジャーがこれまで少なかった。そこで、農という切り口から挑戦する人たちの連携を強化していくために、本ゼミテーマを選定した。

ゼミ長の小倉健太郎氏（合同会社宮内舎）は、雲南市大東町にて田畑の維持を目的とした米の 6 次産業化を手掛けている。宮内舎には都市部の取引先などが生産現場の見学に来るなど、農を通じた関係人口創出に寄与していることから、ゼミ長として選定した。

③里山ツーリズム

雲南市が観光産業を伸ばしていくためには、従来型の観光ツアーではなく、土地の文化や自然資源にスポットを当て「ここでしか得られない」体験をプロデュースしていく必要がある。とくにたたら製鉄の舞台となった豊富な里山を空間として活用し、エコツーリズムやヘルスツーリズムを組成していけるポテンシャルはあるはずである。そこで、ツーリズムの提供に関心のあるメンバーの協働により「里山ツーリズム」を造成していくことを目指し、本テーマを選定した。

ゼミ長の白石章二氏は、複数の外資系コンサルティング会社籍時に観光分野をはじめ多数の産業分野での分析・提言に携わり、近年はヤマハ発動機にて海外拠点のビジネス立ち上げなどを担ってきた。そのような豊富な経験を元に全国の企業向けに里山ツーリズム協議会の設立を提言するなど本分野で精力的に活動していることから、ゼミ長として選定した。

④地域×デジタル

社会のデジタル化が加速度的に進んでいるが、雲南市においては地域の事業者を含めデジタル推進が順調に進んでいるとはいえない。そこで小さなステップでも、デジタルツールに触れて抵抗感をなくし、事業の必要に応じたツールを導入していく事業者が増えていくことを目指して本テーマを選定した。

ゼミ長の一般社団法人エンター（杉村卓哉氏と長谷川直人氏）は、近年子供向けのプログラミングスクールを開講し、多くのデジタルツールを扱える事業者と連携している。デジタルツールを扱う事業者とデジタルに興味のある事業者が混ざり合うことを期待し、ゼミ長に選定した。

⑤フォレストラボ（森の人材育成）

雲南市の大部分を占める里山は、所有者や森林組合にだけでは管理が行き届かず、荒廃して公益的機能が弱まっていく恐れがある。荒廃を防ぐためにも、「里山を目的を持って活用し、活用のために整備する」というサイクルが生まれる必要がある。そこで、里山の価値

(公益的機能)を知って、活用の仕方を考え、整備技術をもった人材を増やしていく必要があることから、本テーマを選定した。

ゼミ長の船木海氏 (WOODSHIP) は、里山の整備 (除伐・草刈り) を請け負いながら、里山資源や里山空間活用のワークショップを開催してきている。船木氏の周りに山仕事に関心ある層が多く見られることから、ゼミ長に選定した。

⑥ベンチャー起業道場

Seed ラボの目標としてスペシャレホープ等への挑戦希望者を確保することがある。上記5つのテーマの探究は、起業家の考えているサービス価値の磨き上げに貢献するものの、同時に現実的な事業計画として表現できるようにするサポートも必要である。そこで課題や資源の領域にかかわらず起業家が事業計画づくりの研鑽をつめるように、本テーマを選定した。

ゼミ長の田中学氏 (合同会社ギフト) は、アパレルブランドの経営やふるさと納税等地域産品の販促支援、宿泊施設の運営など多様なサービスを手掛けてきた。商品・サービスの売上を上げていく計画づくりに長けていることから、ゼミ長に選定した。

(3) 各ゼミの実施結果

Well-beingゼミ(ゼミ長: 矢田明子氏)

日付	テーマ/ゲスト	参加者数
4/21	日本のコミュニティーナースを仏教の視点で解説する/ 松波龍源氏(実験寺院寶幢時)	20名
5/18	令和時代の「ウェルビーイングな挑戦のエコシステム」/ 田ロー成氏(ボーダレス・ジャパン)	30名
10/22	Z世代と考える未来社会 / 松波龍源さん・深井龍之介氏(COTEN)	57名

- Well-beingを切り口に事業をするチャレンジャーのコミュニティを創出するべくオープンなセミナーを開催した。
- 雲南内外の多くのチャレンジャーが集う場が生まれた。出雲や松江の高校生・大学生などの若者も起業家層とも交わり、雲南に関わる機会ともなった。
- 矢田氏が連携可能性の高い参加者どうしを紹介し合う、イベント後の会場で食事の時間を共有する、などにより関係性の広がりが生まれた。



第1回の際の登壇者の写真



第2回のイベントの様子



第3回のイベントの様子

ケアする庭・エチカ(ゼミ長:小倉健太郎氏)

日付	テーマ/ゲスト	参加者数
6/11	他者の芋を植える	8名
7/11	オーガニックな食の現場を体験する	4名
10/3	成長を終えた社会で農と共に豊かに生きる/高橋博之氏(株式会社雨風太陽)	1部18名 2部12名
11/4	「スローな食」を深掘りする～農村と事業と多様性の哲学～/ 佐々木晃也氏(哲学研究者)	8名

- 地域の「農」作業を軸として多様な人材が交流する場を目指して、協働作業体験、先駆者との対話、哲学対話を実施した。
- 地域の農業従事者、地域内の事業者、地域外の事業者など多様なメンバーが肩書と関係なく共同作業をすることで広がりのある会話と相互理解が生まれていった。
- 地産地消の地域づくりを支える若手人材の巻き込みにつながった。



第1回のイベントの様子



高橋氏を招いた勉強会



佐々木氏を招いた勉強会

里山ツーリズムゼミ (ゼミ長:白石章二氏)

日付	テーマ/ゲスト	参加者
6/13	京都の里山の恩恵を来訪者と分かちあうROOTSが大切にしていること / 中山慶氏 (ROOTS)	7名
7/11	LIFULLのLiving Anywhere Commonsプロジェクトについて / 北辻巧多郎氏	5名
7/30	(TABIKALA共催イベント) インバウンド観光ビジネスのはじめの一歩 / TABIKALA サミラ氏	18名
8/9	広域DMOの可能性	5名
9/14	シェア自転車を観光に活かす! / 中島幹彰さん	5名
9/25-26	京都京北の里山ツーリズムでLocal Wisdomを体感する / 中山慶氏・曾 紉蘭氏 (ROOTS)	6名
10/11	京北ツアー振り返り、インバウンドモニターツアー報告	5名
11/15	12/9-10ツアーの企画ディスカッション	2名

日付	テーマ/ゲスト	参加者
11/9-10	里山ツーリズムモニターツアー@あわいの杜 (民谷)	4名
12/13	地域発ビジネスでも実践できるリッチ層の心に響くサービスと情報発信とは? / 小幡元氏・山田かな氏 (エスティローダー・ジャパン)	10名

- 雲南独自のツーリズムの実現可能性について実践者の共通認識化を目指し、地域外の先駆者からのインプットと先進地フィールドワーク、モニターツアーを実施。
- 市内の観光業者や田部グループ、Seed応募者をなど多様なメンバーが集い、ツーリズムを造成するための人材や外部機会などが共有知となった。
- 雲南市の新しいツーリズムを作っていくメンバーが集って連携していく機運ができたことが最大の成果
- これらの勉強会のほか、東広島DMOのヒアリングを経て、雲南市役所への広域DMO創設の提言を行った。
- 雲南市観光協会と協議し、次年度少しずつ人的交流をしていく可能性がみえた。



ROOTS中山氏の勉強会



LCA北辻氏を招いてのイベント



「シェア自転車を観光に活かす!」の参加者



TABIKALAとの共催イベント参加者の集合写真



京北の里山ツーリズム視察

フォレストラボ（ゼミ長：WOODSHIP 船木海氏）

日付	テーマ/ゲスト	参加者
5/27	広がる景色の意味を知る	6名
6/24	山林の役割を知る	5名
7/29	林業の歴史を知る	6名
9/22	知識編集集編～里山を"見る力"を手に入れる～	11名
10/14	山の草を刈る～刈払機～	6名
10/21	ICTで山の見える化	2名
11/11	森林価値を高める事業作り/野口洋氏（トビムシ） 森林を次世代へ繋げ伝える/室岡郁馬氏(百森/たすきラボ)	7名
11/12	チェーンソーでの伐採/室岡郁馬氏	5名
11/25	特殊伐採を生業にする/妹尾慶氏（FARM SENOO）	8名
12/9	現場でシュミレーション	4名

- 里山荒廃や林業人口減少の原因である「山の仕事が見えない」ことを解消すべく、里山のおもしろさや山仕事のイロハを学ぶ講座や実地研修を実施した。
- 市内外に副業として里山整備を担えるメンバーが可視化され、今後は整備人材育成のスキームとして確立していける見込みである。
- 里山ツーリズムゼミとのコラボにより、体験コンテンツとしての可能性も確認できた。

山の役割や林業の歴史を知る。
景色の意味や成り立ちがわかり
見る目が変わった。



第3回のイベントの様子



「特殊伐採を生業にする」のイベントの様子



「ICTで山を見える化」イベントの様子



座学総集編の様子



「チェーンソーでの伐採」のイベントの様子

地域×デジタルゼミ（ゼミ長：杉村卓哉氏・長谷川直人氏）

日付	テーマ/ゲスト	参加者
7/11	Instagram講座/藤原美沙さん	13名
8/22	やってみようChatGPT	14名
9/19	VRに触れて、新しいエンタメの可能性を探ろう/山田宏道氏（トルクス）	7名
11/12	雲南プログラミングFES	—
3/20	「子どもたちがデジタルを活用する地域へ」 末廣優太さん（みんなのコード）	21名

- 地域でデジタルを活用して事業の促進を目指し、デジタルツールの学習会を実施した。
- 個人事業主、地元事業者や地域自主組織といった多様な参加者においてデジタルツールの活用に関心を持っている層が可視化された。
- デジタルに対する関心・ニーズや可能性の解像度が上がったことで、エンターの立ち上げたデジタルファブラボ「ピコテラス」を活かした、子どもたちによる地域課題解決という可能性も見えてきている。

VRに触れる参加者



みんなのコードによる講演会



ベンチャー起業道場（ゼミ長：田中学氏）

- 事業の立ち上げ支援となるコミュニティづくりを目指し、事業計画の基礎、事業家の事例紹介、参加メンバーの事業計画のブラッシュアップを実施。
- 事例研究に多くの参加者が集まり起業を志す人達の分野横断的なつながりが生まれた。
- Seed地域おこし協力隊の第1期生の事業計画を詳細に検討して採算の難しさをあぶり出すことができ、事業計画の見直しにつながった。

日付	テーマ/ゲスト	参加者
7/21	世界一簡単な事業計画の作り方	12名
8/18	事例研究：幡屋便利軒 杉原雅也氏	12名
9/29	事例研究：有限会社小川商店 小川知興氏	13名
10/26	地域おこし協力隊1期生の事業計画ブラッシュアップ①	6名
11/25	地域おこし協力隊1期生の事業計画ブラッシュアップ②	3名

第1回のイベントの様子



第3回のイベントの様子

ブラッシュアップ会の様子



(4) 報告会

12月10日に開催されたソーシャルチャレンジ大発表会にて以下のメンバーが報告を行った。（資料2-6参照）

氏名・団体名	発表テーマ	主に参加したゼミ
船木海（WOODSHIP）	「フォレストラボ」で里山活用のデザインと整備をする人材を養成	フォレストラボ・ゼミ長
サミーラ・グナワラデナ（株式会社タビカラ）	インバウンド観光客を呼び込む雲南地域の風土を活かしたツーリズム	里山ツーリズム
吉田勇輝（Guesthouse Ikiru）	ゲストハウスを通じた「新しい生き方」の提供	ベンチャー起業道場
鳥谷博史（一般社団法人エンター）	子どもたちがデジタルで遊び学べる居場所「ピコテラス」	地域×デジタル
高木奈美（mama's smile はぐ/NALU 助産院）	産前産後のママたちを支えるコミュニティづくり	Well-being
山崎正則（株式会社 Community Care）	いつまでも自分らしく暮らせるまちを目指して人とコトがつながりあうきつ	ケアする庭エチカなど5つのゼミ

	かけになる場所をみんなで創る	
--	----------------	--

(5) 総括

本年度、初の試みとして **Seed** ラボという枠組みを創設した結果、**37 回の学びの場**の開催による**約 200 名（ユニーク 195 名）の参加者**の関係づくりが実現できた。また合計 **18 名のゲスト講師**を招き、先端的な実践の知見を雲南にもたらしうることができた。

他プログラムとの連携としては、地域おこし協力隊として着任した **Seed1** 期生が、**Seed** ラボの集まりに何度も参加して関係づくり及び事業計画のブラッシュアップの機会として最大限活用していたり、**Seed2** 期の応募者が複数のゼミにリピート参加するケースが見られた。スペシャレ・ホープ採択者 1 名も、1 度参加した。「コミュニティによる伴走」の可能性が確認できたことから、さらに有効活用できるような案内方法を検討したい。

一方で反省点としては、上記のように多くのインプットが得られた反面、各起業家が計画している取り組みについて相互に開示して磨き合う時間配分が不足していた。起業家どうしの密な関係づくりという観点から、改善すべき点であると考ええる。

<参考資料>

資料 2-1：おっちラボウェブサイト上の **Seed** ラボ特設ページ

資料 2-2：**Seed** ラボ集客に向けての取り組み

資料 2-3：**Seed** ラボ開催報告

資料 2-4：ゼミ長会議資料

資料 2-5：**Seed** ラボ参加者名簿

資料 2-6：ソーシャルチャレンジ大発表会当日配布資料

4.3. Seed ～起業型地域おこし協力隊による生態系強化～

(1) Seed の概要および目的

雲南において地域への社会的・経済的インパクトを与えられる起業案件がまだ不足しているという問題意識のもとで、雲南市外から「雲南で挑戦したい」という人材を獲得する必要があると見えてきた。そのため、令和 3 年度に雲南市として初めて起業型地域おこし協力隊の公募を実施することとした。令和 4 年度、おっちラボは引き続きこの募集・選考のプロセスにおいて応募者の伴走支援を行った。

インパクトを出す事業をつくるという目的に照らし、雲南地域内でプロデューサー的視点を持つ先輩起業家の力を借りて地域内の連携関係を早期に構築することが有効であると想定し、先輩起業家層からの推薦とバックアップを軸として募集・伴走を行うこととした。

以下の内容の伴走の結果、3 名（うち推薦 1 名）から応募を受付け、全員書類選考通過とし、2 名が 12 月 3 日（日）に選考会に臨んだ。

(2) 実施内容

① 公募における企画・コーディネート

- 本制度が GP 的人材（自ら覚悟を決めてまちの変化をつくっていく人材）の募集を主眼としていたことから、昨年度に引き続き、「地域から世界を変えるラボ」「変人よ、集まれ。」などの制度の柱は継続することとした。

- また、公募において、「雲南市の起業家生態系のなかですでに柱となっている人材と協働して、変化の連鎖を生み出す」ことが基本理念となっていたことから、今年度もおちラボにおいて、幸雲南塾卒業生や過去のスペシャレ採択者と協議した。推薦による応募者は1名であった。
- ローカルベンチャー協議会等のチャンネルを通じて広報活動を実施した。



② 申請書のブラッシュアップ

- 申請にあたっての申請書作成において、事前の依頼があった応募者には、申請書のブラッシュアップを実施した。

③ 事業計画作成のためのコーディネート

- 選考会前の事業プランブラッシュアップを目的として、書類選考通過者が雲南市を訪れフィールドワークをする「Seed ゼミ」を実施した。各人のゼミのスケジュールは以下のとおり。

応募者	プラン	コーディネート内容（※写真）
岩田翔平氏	ワインバレー構想を通じたテロワールツーリズムの創造	<p>9/14 Seed ラボ 里山ツーリズム(CogiCogi 中島さん)</p> <p>9/22 奥出雲葡萄園 阿部社長と面談 ※左上 あおぞら福社会森山氏・宮内舎小倉氏 (翌日森山氏が尺の内農園を案内) ※右上</p> <p>9/25-26 Seed ラボ 里山ツーリズム 京北視察 ※左下</p> <p>10/3 Seed ラボ ケアする庭 (高橋博之さん)</p> <p>10/31 農業振興課と農地候補地につき協議</p> <p>11/4 Seed ラボ ケアする庭(佐々木晃也さん) ※右下 岩田氏・小堀氏と懇親会</p>
	奥出雲葡萄園阿部社長と	あおぞら福社会森山氏らと
		
	京都京北視察	Seed ラボ ケアする庭参加
		

池田将太氏	ソーラーシェアリング事業	8/17, 9/28 などで協議： 社員候補を協力隊とする可能性検討 11/6 福岡にて面談
小堀祥仁氏	共につくる人と場の物語を紡ぐプレイスメイキング	10/1 大東町街並み案内 高島生花店北見氏 / 旧商店街の酒蔵等見学 11/4 がっしょ祭りー鹿糠氏と顔合わせ 三新塔交流センター上代会会長ヒアリング 岩田氏・小堀氏と懇親会 11/22 木次の街並みについてのプレスト会議 鹿糠氏、梅澤氏など参加
大東街並みフィールドワーク		プレスト会議のメモ
		

④ Seed プラン発表会に向けた伴走及び運営補助

- 事前に各応募者との面談により、プレゼンテーション内容のブラッシュアップを実施。
- 次年度の地域おこし協力隊の採択に向けた選考会を兼ねて、プラン発表会を以下の概要で開催。おっちラボは運営補助を担った。

日時 令和5年12月3日(日)9時30分より

内容

9時30分～ 開会

- 1) 小堀氏発表「共につくる人と場の物語を紡ぐプレイスメイキング」
 - 2) 岩田氏発表「ワインバレー構想を通じたテロワールツーリズムの創造」
 - 3) Seed1 期生中野弘也氏活動状況報告 「雲南地域商社の立ち上げ」
 - 4) Seed1 期生吉田勇輝氏活動状況報告 「Guesthouse Ikiru」
- 発表者と来場者との交流会 (20分 ※予定)

12時 閉会

<参考資料>

資料 3-1 : Seed プラン発表会での発表資料

4.4. ローカルベンチャー推進協議会の雲南ローカル事務局業務

(1) ローカルベンチャー協議会の概要および目的

ローカルベンチャー推進協議会（以下「協議会」）は、2016年9月、地域の新たな経済を生み出すローカルベンチャーの輩出・育成を目指し、西粟倉村とNPO法人ETIC.の呼びかけに賛同した8つの自治体により、内閣府の地方創生推進交付金に「広域連携によるローカルベンチャー推進事業」として申請し、採択されたのをきっかけに発足した（後に「ローカルベンチャー協議会」に改称）。自治体が拠出金を負担し、事務局をNPO法人ETIC.に委託して運営している。自治体同士や民間団体が連携し、全国からローカルベンチャーの担い手と呼び込み、事業成長を支援し、5年間で総額50.4億円のローカルベンチャーによる売上規模増、114件の起業家創出、269人の起業型・経営型人材の地域へのマッチングを目指して活動を開始した。

2021年度より第2期に入り、各地域でよりインパクト（変化）の大きい実践を生み出していくための支援を検討する場となっている。

代表幹事：岡山県西粟倉村

幹事自治体：北海道同厚真町、宮城県気仙沼市、島根県雲南市、愛媛県久万高原町、

パートナー自治体：約10自治体

事務局：NPO法人エティック.

雲南市と当法人は、本事業（課題解決型人材育成事業）に関して、主に雲南市のチャレンジャーを支援する人材ネットワークの仕組み（属人的でない繋がり）、雲南市で起業する都市部人材の獲得、コーディネーター力の養成の3点を課題として認識していた。雲南市と当法人は、NPO法人ETIC.の宮城治男代表理事より協議会への加入の打診を受けて検討し、加入することで上記課題の改善につながると判断し、当法人をローカル事務局とすることとして参加を決めた。

これを受けて、平成29年5月15日の協議会の総会において、雲南市の加入が承認された。

本年度は、①都市圏の起業家型人材等とのネットワーク構築や人材誘致、②先進自治体等とのノウハウ共有による地域で起業家を持続的に育成確保していくためのプログラムや仕組みの開発を目的においた。

(2) 令和5年度の協議会における協働内容

①都市圏の起業家型人材等とのネットワーク構築や人材誘致

日付	実施内容	主な成果
6月～ 12月	<p>【ローカルベンチャーラボの活用】 雲南起業家の推薦：SNS等を活用し、LVラボの募集開始を周知した。 ※1</p> <p>【コーディネーターによる案件組成】 雲南での若者支援”寮”構想につきエティックの伴走を受けた。</p> <p>【研究プロジェクト】 森あそびラボ：各地の森林空間活用事例が増えるなか集客の課題を検討する場として実施。→里山ツーリズム協議会立ち上げ。（詳細は資料3-1、18頁）</p>	<p>◎LVラボへの参加者1名を送り出すことができた。</p> <p>◎”寮”構想について伴走を受けた団体が来期のスペシャレホープ申請を検討している。</p> <p>◎Beyonders制度を活用して都市圏の社会人プロボノ人材4名が参画。</p>

9月	【地域・企業共創ラボ】 ウェルビーイングをテーマにフィールドワーク受け入れ。株式会社 CNC などを訪問。	○雲南でのフィールドワークをきっかけに、参加企業どうしが連携し具体的なアクションを起こすための議論が始まっている。
12月 9-10 日	里山ツーリズムをテーマに吉田町民谷の古民家を拠点として林業体験等を実施。	○Seed ラボのゼミ横断で実施し、里山ツーリズム協議会からも参加。ツーリズムコンテンツを磨き上げるためのよき試行機会となった。

②起業家を持続的に育成確保していくためのプログラムや仕組みの開発

日付	実施内容	成果
5/26 - 27	【Beyond Conference2023 参加】 京都京北で開催された大企業と地域課題を探求する会合に参加し、「里山ツーリズム」分科会を当法人の白石章二理事が担当した。（※1）	◎分科会で登壇していただいた Roots 中山氏・フェイラン氏のもとに Seed ラボの視察に行く計画立案 （9月に実現）。 ◎里山ツーリズム協議会が立ち上がり、大企業メンバーも参加。現在も定例会を継続している。
7/8-9	【ローカルリーダーズミーティング】 宮城県気仙沼市にて各地のプレーヤーや行政・民間企業等がセクターを超えて共創する会議に参加。「森林から生まれる事業の始め方」「世界から求められる旅のカタチ」というテーマで分科会を開催した。そのほか 2 つの分科会で雲南関係者が登壇した。下記概要のとおり。 （※2）	◎事業をしている全国のプレーヤー、企業、中間支援組織と、取組みの共有と関係構築。 ◎担当分科会において BASE TRES 松本氏や美ら地球山田氏などと関係構築。一つ一つ里山での実践を積み重ねて現在の事業に至っている事例を学び、雲南で進むべき方向性のヒントを得た。 ◎参加者が「里山ツーリズム」の活動に参画した。
11/1-2	【ローカル共創イニシアティブ】 日本郵政の派遣プログラムの一環として、香川県三豊市を視察。資料 4-3	◎地元事業者の 3 代目などの若手が出資をしてゲストハウスを経営するなど、行政に頼らないまちづくりのヒントが得られた。
1/24-26	【協議会合宿】 錦江町のローカルベンチャー事業における重点テーマについて、フィールドワークを通じて実地視察のうえワークショップにて発展の可能性を議論。また LV 事業終了後の展望を協議（※3）	◎錦江町の林業・特用林産物の生産現場を視察し、雲南においても実現可能な取り組みであることを学んだ。 ◎他地域の協議会メンバーから 特定地域づくり事業協同組合の実際の運用状況をヒアリング し、雲南の協同組合のうんえい

※1 Beyond カンファレンス 2023 分科会内容

タイトル	日本の里山・森あそびツーリズムのインバウンド向けプラットフォーム創り
内容	里山・森あそびを軸としたインバウンドツーリズムの地方インストールを顧客調査から各地方の戦略作り、実際の集客サービスをセットで提供するプラットフォーム事業を創る。インバウンド向け整備には時間が掛かる地域・団体向けには、企業研修のインストール支援も用意していく。

登壇者	白石 章二 氏(ヤマハ発動機 企画財務本部経営改革アドバイザー) 曾 緋蘭 氏 (ROOTS Founder・Social Designer) 中山 慶 氏 (ROOTS Founder・代表取締役) 他
ネクステ	LLM@気仙沼での分科会に向け、全5回の作戦会議実施に

(資料 4-1、18 頁)

※2 ローカルリーダーズミーティングの参加者および担当分科会の内容は以下のとおり。

参加者:172名

都市部企業所属参加者(25名)、LV協議会以外の自治体(1名)、LV協議会以外
の中間支援、協力隊(11名)、気仙沼市内参加者(57名)、登壇者、ピッチプレイ
ヤー(25名)、協議会メンバー(35名)、その他(ラボ生、事業者、地域の企業人な
ど)(18名)

(資料 4-1、12 頁)

2) 地域における自然資源と共生した、森林から生まれる事業の始め方	
内容	自然資源の保護や山林の利活用への関心が高まり、各地でさまざまな実践が始まっています。さらに、素材開発や木材利用などの動きも加速しています。ただ、「事例はあるが、地域にプレイヤーがない」という声を聞くこともあります。大規模な投資や革新的な技術に抛らずとも、身近なところから始められる取組みもある。 そこで、森をうまく使っているプレイヤーをピックアップし、この分野のマーケットの可能性についてお話を伺う。また、アウトドア等の国内外の変容、こういう取組みへのハードルの高さ、補助金の動向など解説を加えながら、自然資源を活用した事業の始め方と、展望について語り合う。
登壇者	松本潤一郎 氏 株式会社BASE TRES 代表取締役 渡部真之助 氏 株式会社フォレストリー 代表取締役
セッション オーナー	伊藤敦志 愛媛県久万高原町役場 小山敏史 北海道厚真町役場 小俣健三郎 島根県雲南市NPO法人おっちラボ

(資料 4-1、8 頁)

6) 急回復する世界の旅行需要。変化する価値観と世界から求められる旅のカタチとは？	
内容	<p>コロナ後、旅行需要が急速に回復。特にインバウンドの動きは顕著で、2025年までにはコロナ前の年3000万人まで回復の見通しであり、2030年には6000万人を目指すという政府指針もある。なかでも、モダンラグジュアリー、1ヶ月長期滞在、サステナブルツーリズム、爆買い後の新しいインバウンド、オーバーツーリズムの分散化など、さまざまなキーワードが注目されている。たとえばモダンラグジュアリーに関しては、「昔は、社会的地位を誇示するための消費だったが、今は、自らの信念を誇示するための消費。環境や健康などに良いものを積極的に選択することで、社会にインパクトを与えたり、未来に何かしら貢献することが重要視されている。特に若年層にとってのラグジュアリーで、こうした傾向は顕著。Z世代、ミレニアル世代がラグジュアリー旅行マーケットの中心になれば、パーパス・ドリブンな消費がマーケット全体の半分以上を占めるだろう」といわれている。</p> <p>そこで、具体的な地域のリソースを事例に、何がインバウンド客にとってのバリューなのか。また、観光地開発ではなく観光まちづくりの観点から、地域発で新しい観光の提案につなげるべく、この分野の展望について探っていく。</p>
登壇者	<p>山田 拓 氏 株式会社 美ら地球 代表取締役 若林福成 氏 生物研究家/やまね酒造株式会社 代表取締役兼生物多様性・環境生態学研究センター長/香川大学ビジネススクール 協力研究員 白石章二 氏 ヤマハ発動機株式会社 企画財務本部経営改革アドバイザー</p>
セッション オーナー	<p>小山敏史 北海道 厚真町役場 小俣健三郎 島根県雲南市NPO法人おっちらボ</p>

(資料 4-1、10 頁)

上記のほか、NPO 法人エティックとともに、森林空間活用に関して、生物多様性という観点から資金調達を仕掛ける戦略を検討している。

※3 協議会合宿の内容

実施日時	名称	内容
1月24～26日	協議会合宿&総会@錦江町	<p>■Day1</p> <p>15:00 オリエンテーション (チェックイン、目的共有、各地域プレゼン)</p> <p>16:30 浜田農園視察</p> <p>18:30 懇親会</p> <p>■Day2</p> <p>9:00 錦江町についてインプット(現状と課題)</p> <p>9:30 コース別フィールドワーク (①ローカルベンチャー②農業のスマート化③森林産業について)</p> <p>13:30 ワークショップ(フィールドワークを経て)</p> <p>16:00 ディスカッション① (ローカルリーダーズミーティングについて)</p> <p>17:45 ディスカッション② (LV白書と2年後の戦略について)</p> <p>■Day3</p> <p>9:00 LV協議会総会</p> <p>12:00 終了</p>

(資料 4-1、19 頁)

(3) 総括

過去2年度に引き続き、雲南市のまちづくりにおける空白地帯に近かった「山林空間の活用」を促進する「森あそびラボ」というテーマで、カンファレンスでの分科会企画などを積極的に行い、全国のプレーヤーとネットワークを構築した。これが里山ツーリズム協議会として組織化され、このテーマでの探求をする事務局・リサーチメンバーとして、協議会の提供する機会を通じて4名の副業人材を獲得し、雲南を支援する人材の層が厚くなった。

昨年度同様、雲南で起業する人材の獲得にはつながっていないが、雲南の団体が協議会のコーディネーターによる伴走を受けてスペシャレホープへの申請を検討しているなど、雲南の起業家の育成の機会として有効である。来年度、ローカルリーダーズミーティングへの参加も含め、さらなる活用を工夫していく。

<参考資料>

資料4-1：「ローカルベンチャー推進事業」に関する事業報告書

資料4-2：ローカルベンチャーラボウェブサイト

資料4-3：三豊市視察先

5. 総括～今後への提言～

スペシャレ・ホープに関しては、取り組みを始めたばかりの方が申請してきた場合、そのプランの実現可能性を判断する材料が乏しく審査も難しくなることが共創委員から指摘された。人件費まで含めて補助する起業家に有利な制度だからこそ、すでに試行を繰り返し一定の確信をもって事業プランを語るチャレンジャーを発掘していく必要がある。現在、幸雲南塾経験者、Seedラボ参加者、中小企業家同友会関係者からスペシャレへの関心を表明してもらっており、こうした層へのコミュニケーションを手厚くしていくことが次年度以降の申し送りである。

今年度から開始したSeedラボは、予想を超える参加者が集まり、事業づくりに関心ある層の新たなつながり創出となった。ゼミ間の連携についても企画が始まるなど、化学反動的にさまざまな事業の種が芽生える場となる可能性がある。その可能性を高めていくためにも、より具体的に、連携によって実現したいビジョンを描き、そこに向けて連携して活動が起こるようなファシリテーション（プロデュース視点をもった働きかけ）が重要である。

また、2期目となる、起業型地域おこし協力隊の公募をし、2名の採択ができたが、両名とも雲南での人脈もありただちにいろいろな連携が始められそうであったことに加え、Seedラボの機会も活用してさらに事業づくりに資する関係構築が進み、発表会でも応援者からコメントをいただくことができたことは、今後の指針となる。

以上

事業結果報告書

1 事業内容

事業名	高校生が GIS を使って町と里山が見える化する
実施期間	令和 5 年 7 月 7 日～令和 6 年 3 月 31 日
実施場所	雲南市内
具体的な内容	<p>【1】 企画・設計・準備</p> <p>1) ワークショップの企画・設計 ワークショップにおいて地域のニーズに沿うデータ取得が実現できるように、学校・保護者や地域の山林整備従事者からまちの危険箇所や山林の資源等の把握についてニーズのヒアリングをし、ニーズに対応するアウトプットが出るように、以下のようなワークショップ企画の設計をした。</p> <ul style="list-style-type: none">・まちの危険箇所については、学校周辺の車の見通しの悪い角、歩道の狭い場所、水路等への落下の危険性などを把握するため、GIS 調査票を用いて記録し、記録後に参加者で情報の共有・振り返りを行うこととした。・山林把握については、除去を要する倒木等の作業予定箇所、きのこの等の資源、人が通れる道の明示という目的で、調査票を持ってキャンプ場「かみくの桃源郷」の周縁部を歩いて GIS 調査票を用いて記録し、記録後に参加者で情報の共有・振り返りを行うこととした。 <p>2) Web マップ上に課題や資源を可視化する調査システム作成 上記ニーズとワークショップの設計にを踏まえ、高校生等によるデータ収集ができるように GIS ソフト「Arc GIS Online」を活用してデータ調査フォームおよび取得したデータを可視化する Web マップのシステムを制作した。</p> <p>3) ワークショップ実施のための高校・調査対象地域との調整 ワークショップ時の高校生の移動支援方法、デバイスの提供方法等について協議を行った。また土地への立ち入り等については、調査対象地域の管理者と協議し、合意形成をした。</p> <ul style="list-style-type: none">・里山マップワークショップ時の移動支援に関しては、出雲大東駅から長谷川氏の自家用車にて現地まで送迎することとした。・調査時のデバイスとなるスマートフォンは講師より貸与することとした。・里山の土地への立ち入りは、船木氏が整備に関与するキャンプ場周縁を対象地としたことにより、船木氏を通じて了解を得ることができた。

	<p>【2】 高校生と協働したワークショップの実施</p> <p>4)ワークショップ実施 高校生(大東高校及び三刀屋高校・同掛合分校のパソコン部の生徒)と一緒に、【1】2)の調査フォームを使って Web マップに蓄積・可視化していくワークショップを行った。 ワークショップで得られた情報を分析・整理して地域に対する提言をするには至らなかったが、今後提言に活かす予定である。</p> <p>【ワークショップ・講習会等開催状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8/10:三刀屋高校においてまち歩きワークショップ(同校パソコン部員4名参加) ・9/11:三刀屋高校掛合分校において講習(同高パソコン部員5名参加) ・10/21:大東町久野地区において第1回里山調査ワークショップ(各高のパソコン部員計11名参加) ・1/29:三刀屋高校掛合分校においてGISワークショップ(同高パソコン部員4名参加) ・3/12:大東高校においてGISワークショップ(同高パソコン部員2名参加) ・3/26:大東町久野地区において第2回里山調査ワークショップ→雨天につき、GISワークショップに変更して実施(大東高校パソコン部員3名参加)。 <p>5)次年度以降の展開の戦略策定 次年度以降も高校生とGISによるハザードマップ作成を中心として協働していく方向性を検討した。</p> <p>【事業実施体制】 統括責任者:おっちラボ 代表理事 小俣健三郎 高校生向けワークショップ運営:一般社団法人エンター 共同代表 長谷川直人氏 GIS調査システム構築、ワークショップ運営補助:おっちラボ 梶谷知世 里山調査案内人:WOODSHIP 船木海氏</p>
<p>事業成果 (実施団体の評価)</p>	<p>本事業によって、</p> <p>(1)該当地域の通学路や生活道路における危険や、日常的に確認が困難な里山の中にある道、資源(動植物や景観)あるいは修繕・整備が必要な箇所がWebマップ上に可視化されPC上で把握できるようになった。具体的には、以下の6つのマップが作成された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・掛谷小学校用調査フォーム__map ・三刀屋小学校用調査フォーム__map ・作業前後確認フォーム ・資源確認フォーム ・道の調査(久野)

	<p>※大東小学校用調査フォーム__map も用意していたものの、データ送信のエラーでマップ上に調査結果の反映ができなかった。</p> <p>(2)それにより、参加した IT に強い高校生たちに自分たちの暮らす地域の現況について関心や認識が生まれ、地域の課題解決に参画するきっかけが得られた。参加した高校生より以下の声があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 普段歩いている道もデータ収集すると思ってやると違う発見があった。 ・ 歩いて記録した事がデータとして活用される実感があって良かった。 <p>(3)本提案事業を通じた副次的効果として、学校が地域での探究活動に際して IT 技術を活用していく敷居が下がるきっかけになった。教員より以下の声があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ データサイエンスを実際の状況を踏まえてできる事は教科書だけの机上データで行うよりも生徒のモチベーションも上がって良いのではないか。 ・ 地域との連携という意味でも学業や探究と合わせて良い効果があると思う。 <p>以上のように高校生や学校がこうした機会を経て、IT を用いた地域課題解決のための探究活動に向けた意欲を高める効果がみられたことが、本プロジェクトの成果といえる。</p> <p>※なお、「住民どうしで地域の危険への対策や里山整備方針を事実ベースで具体的に話し合うことができるようになり、エビデンスベースな地域自治のあり方に近づく」ことを長期的な成果目標としているが、本年度の事業期間では地域住民との協働には至らず、今後引き続き模索していく方針である。</p>
--	---

別添資料

資料 1: ワークショップのための作成した調査フォーム

資料 2: ワークショップ実施中の様子

資料 3: ワークショップで作成した Web マップと生徒の意見

資料 4: 準備段階の写真

資料 5: SNS 等での実施状況の発信

2 収支決算

(1) 収入 (単位:円)

区分	決算額
活動支援金	500,000
その他の助成金等収入	0
自己資金	119,433
合計	619,433

(2) 支出 (単位:円)

項目	決算額	うち活動支援金
人件費 (代表理事本業務従事)	104,520	0
人件費 (職員賃金)	128,500	113,587
通信運搬費 (ArcGIS)	165,000	165,000
講師謝金 (外部講師:船木氏)	150,000	150,000
講師謝金 (外部講師:長谷川氏)	60,000	60,000
交通費 (職員旅費交通費)	960	960
印刷製本費	4,950	4,950
消耗品費	1,743	1,743
会場使用料	3,760	3,760
合計	619,433	500,000

06

事例2 郵便局×地域自主組織による新たな共助の仕組み 概要

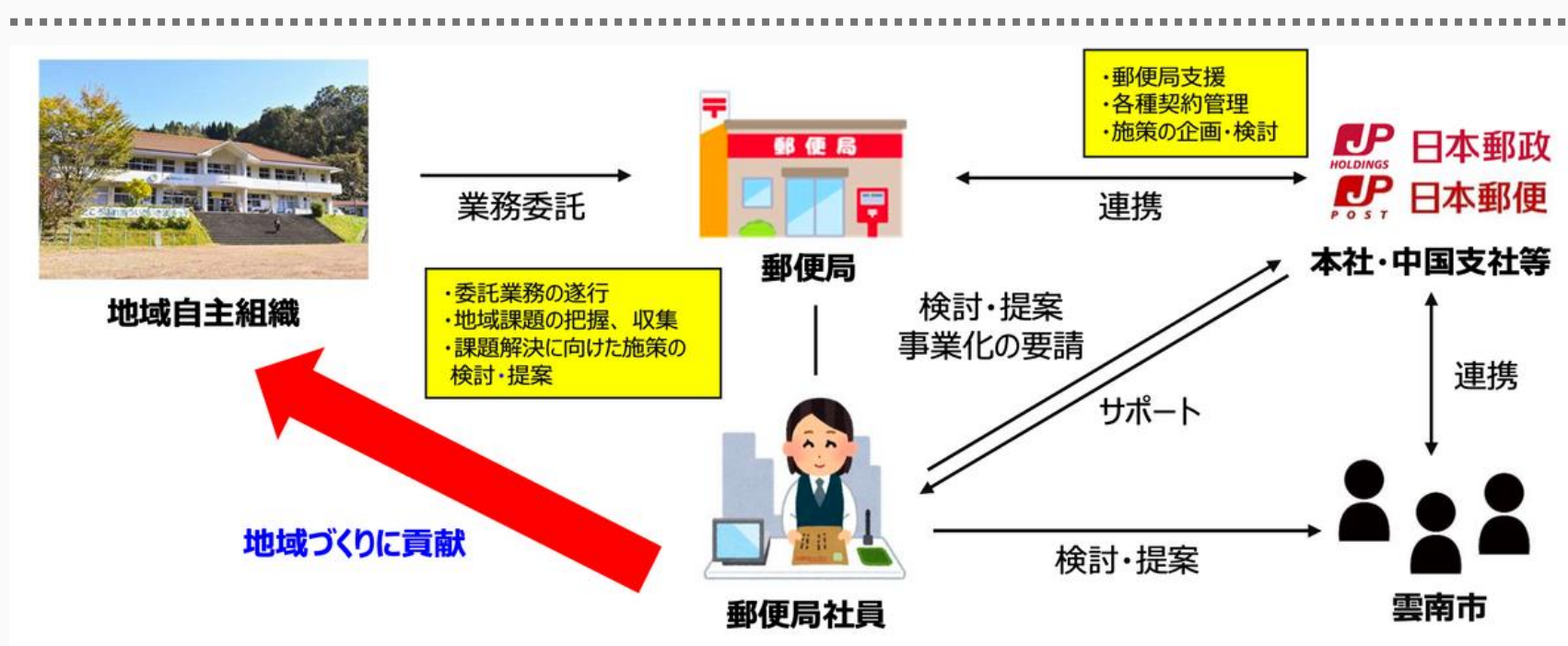
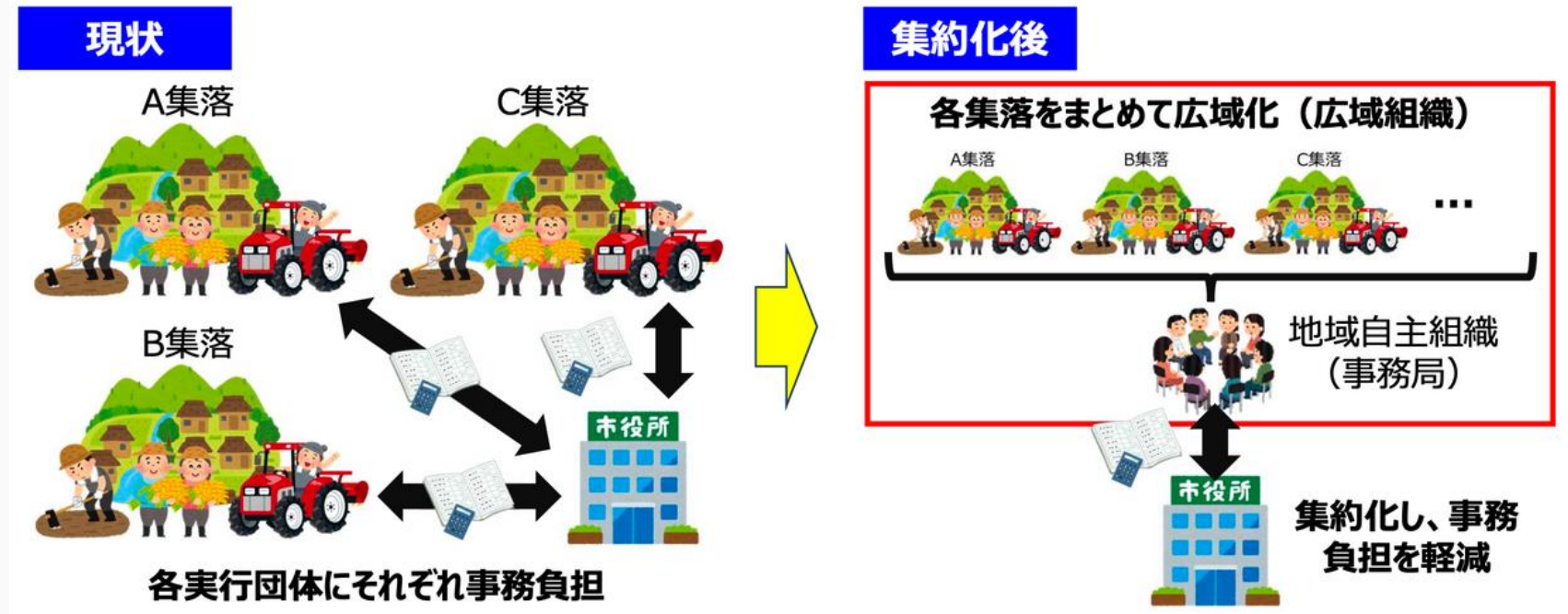
担い手不足だった農業関係交付金事務等を地域自主組織に集約化し、郵便局へ委託。集約化・広域化した農地の新たな活用に向け、原資を獲得して始動。

取組課題

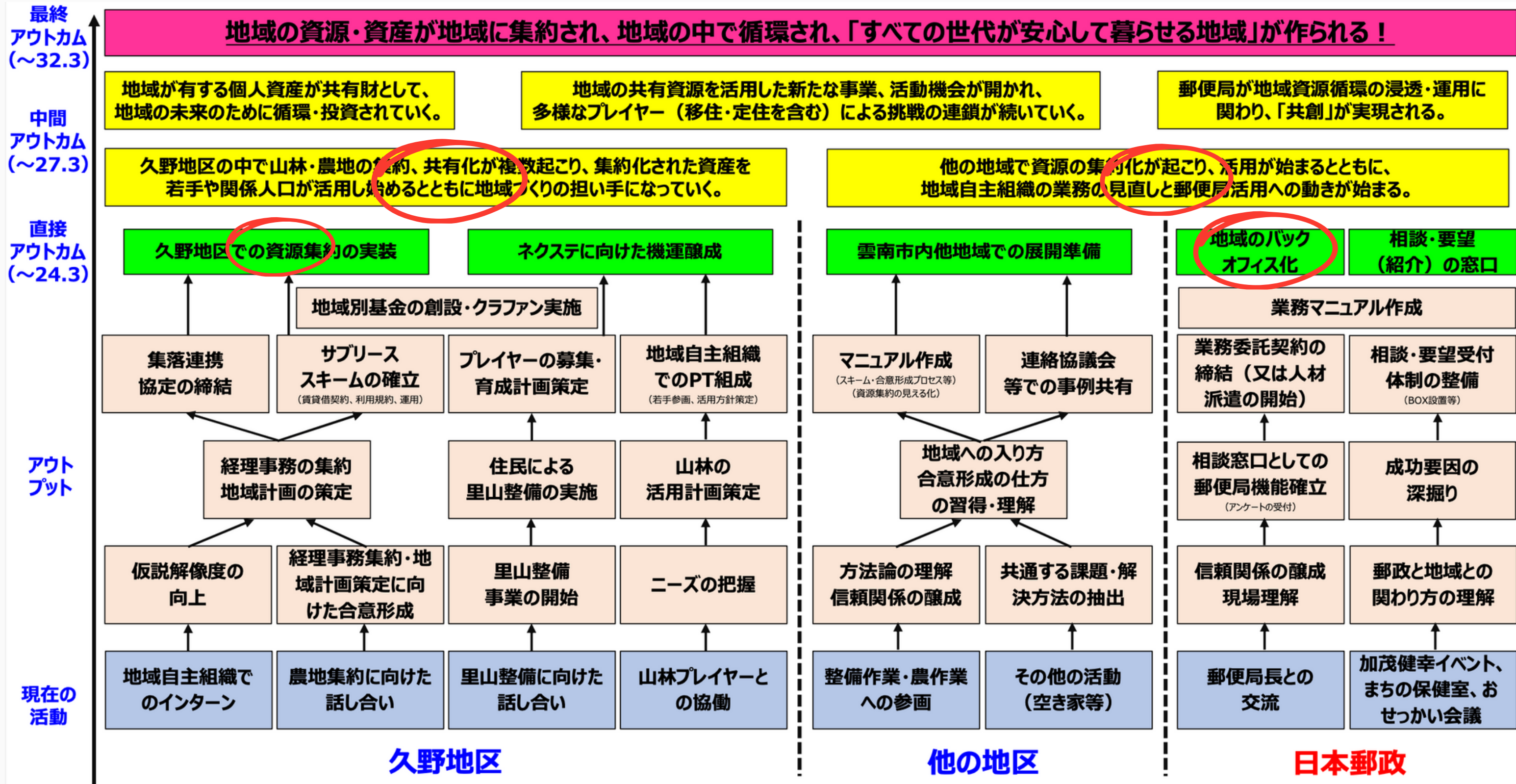
- ・ 山林や農地などの地域資源の集約と循環の仕組み構築
- ・ 各集落で実施していた農業関係交付金の事務処理の集約化による負担軽減と、集約化後の農地の新たな活用
- ・ 将来的には農地に限らず、地域の課題に対して、郵便局が地域づくりの伴走者として、解決を支援する仕組みの構築

事業内容

- ・ 各集落の農業関係交付金の事務処理を地域自主組織に集約化し、その後の広域化により地区として新たな交付加算金を取得
- ・ 担い手不足であった交付金の経理事務等と運営委員会の企画事務を郵便局に業務委託し、次期の計画策定に取り組む



事例2 郵便局×地域自主組織による新たな共助の仕組み ロジックモデル



事例2 郵便局×地域自主組による新たな共助の仕組み アウトカム

久野地区での資源集約 の実装

- ・2023年度後半に農地の集約化・広域化をまとめる事務局（地域自主組織が担う）の立ち上げ準備と連携協定案の作成に取り組み、2024年4月には最初の集約化に向けた協定を締結予定。2025年度には7つの集落を1つの地区として集約化する。

郵便局が地域のバック オフィス化

- ・2023年度後半に郵便局への農業関係交付金の事務処理委託について検討を進めてきた。2024年4月に地域自主組織と郵便局の業務委託契約を締結する予定。
- ・郵便局は経理事務、提出書類取りまとめなどの一般事務、そして運営委員会の開催に向けた調整や当日ファシリテーションなど企画事務を合わせ年94時間程度の業務を担う。
- ・7集落が集約化された場合には、年間約80万円の業務委託収入が発生する見込み。

久野地区内外と他の 地域資産への広がり

- ・本スキームは農業の担い手不足に悩む他地区、そして全国への展開が可能。尚、雲南市内では約20地域で広域化が未達であり、**人口減少が進む中山間地域では潜在的ニーズがある。**
- ・また、山林や里山、空き家など他の地域資産の共有・集約化への波及効果も期待。

新たな共助の仕組みを 担う郵便局へ

- ・郵便局**社員**が地域住民から得ている信頼と実績、**地域の中にある郵便局**という強みを活かして、**郵便局が地域づくりの伴走者として、新たな共助の仕組みづくりを行う役割を発掘。**